

広島俳句倶楽部

令和二年四月作品集

巖島

高尾ひとみ

巖島神社が世界遺産に登録され、国内外から多くの人が訪れるようになった。

神社だけでなく、大聖院や初代総理大臣である伊藤博文が篤く信仰した三鬼大権現などとともに、弥山を主峰とする山々と人の手のほとんど入らぬ原始林に覆われた島そのものも人々の崇拜の対象であった。

豊かな自然、春の日差しや風。幼いころから両親に連れられ毎年初詣をしたこの巖島は、私にとって特別な島である。

隧道を抜けたる先の椿かな

沈丁に隧道の声届きたる

馬酔木咲く峠に風のよくとほり

ときをりは白波の立つ春の海

囀りの坂を下りて海に出づ

垣根ごし椿一輪見てをりぬ

春の日に雨脚のよく見えてをり

雨やんでせせらぎに差す春日かな

せせらぎの右岸に咲ける山桜

春の雲弥山を越えてゆきにけり

名山の遠く聳ゆる野梅かな

楊梅の咲いて立ち寄る太子堂

歳二つ並んでゐたり山笑ふ

本降りの雨となりたる春の川

木蓮やベンチに赤子立たせたる

春の雨上がりし街に人と会ふ

とつぷりと暮れて社の公孫樹の芽

あたらしき空のありけり花杏

鳥の恋はるかな山もよく見えて

坂がちの町を歩いて蝶の昼

花ごぶし見下ろし高所作業せり

小流れを上つてゐたる鰻の群

宵星の下にふらこ揺れてをり

雨止みし道の匂へる春の園

桜咲く山へと続くつづら折り

風光り引き渡さるる新築棟

春の月町の灯点り始めたる

朝まだき雨戸を揺らす春疾風

土手歩く人に散りたる桜かな

手を繋ぐ姉妹逃げ水通りけり

風光る漁船の上を鷗とび

ト口箱を山と積み上げ針魚糶る

春の朝テトラポットに鵜来て

うぐひすの声聞く宮にひとり居て

続きるるしりとり遊び花の下

空の青川に映りて花筏

月参りの僧の来てゐる牡丹かな

夕暮の牡丹はらりと散りにけり

背負ひ籠のたかみをずしりと重きかな

進むとも見えぬ巨船や青岬

佐保光俊

村上正人

あざみ

三桎の花の咲きたる動物園

花曇ベツドの母の爪を切る

春の雪玄関先に赤子抱き

自転車に並ぶ自転車春の雪

父と子のよく似た仕種桜餅

永き日の本屋で本を選びたる

日永し子と先生の鬼ごっこ

春の風土の匂ひが不意にして

三月のグランドピアノ開きたる

チエンバロを真近で聞いて春の夕

黒松の幹に降りけり春の雨

石段に柳の花の降り積もる

中学生バケツ一杯眼張釣る

兄弟に眼張煮付ける夕餉かな

大公孫樹枝の先まで芽吹きたる

棘のなか枸橘の花咲きにけり

朝露の立ち昇りたる山桜

花の下とほりて母の墓へ行く

川風にゆさゆさ揺れて夕桜

潮入の波の騒げる夕桜

紺青の空に辛夷の咲きにけり

てふてふとまた出会ひたる土手の道

石段を雨の打ちをり花櫓

尖塔の左右に流れ春の雲

瀬の音の近くに蜂の巣箱置く

春日傘へタルボートへ手を振つて

ひもすがら高き波音若緑

花の塵忘れ潮へと続きをり

しばらくは海へと出たるつばくらめ

馬刀を握る千陽入日に染まりたる

亜矢

敬子

暁子

明け方の桜に知らぬ鳥の来る

名の知らぬ鳥の声する桜かな

雨やみて桜に雀来てをりぬ

夕風のとめどもなくて大桜

ひと片のゆつくりと散る桜かな

ときをりの風に桜のふぶきけり

川べりの残花を散らし風の吹く

ときに晴れときに曇りて日永かな

雨音のときどき途切れ春の闇

石楠花の坂に薄日の差しにけり

雪解水父の墓前を流れけり

雨降つて傍に鶯鳴きにけり

母が家に行くたびに見る牡母の芽

げんげんに裸足の赤子下ろしたる

春耕の土にまつすぐ畝を立て

耕牛を巧みに使ふ祖母なりき

桜湯を母と二人で飲みにけり

目の前に桜吹雪の渦巻けり

やはらかき土に馬鈴薯植ゑにけり

薯植ゑて向う山から雨の降る

春の雷山を野原を渡りけり

菜の花の畑の中の駐在所

図書館に本探しをり春ともし

理科室に卓球をして日永し

繭の実を春禽の群啄めり

杖振れば蝶舞ひ上がる土手の道

それぞれの花にてふてふ来りけり

家ごとに花咲く村に入りにけり

住職に案内さるる桜かな

車椅子の落花に夕日差しにけり

高尾ひとみ

ちどり

松本恵和

下萌の側道に来る雀たち

春の午後園児並んで歩きをり

窓越しに春の雲見る昼下がり

少年の自転車ならぶ春の浜

目の前をたんぽぽの絮飛びにけり

赤椿一青に鳥飛び立ちぬ

春の宵大きな月の現はるる

飛ぶ花の高層ビルの窓よぎる

草餅や父の横顔思ひ出す

山桜見上ぐる先の空青し

美耶

窓すこし開けられしまま春の雲

気がつけば少し動いて春の雲

交差点見下ろしてゐる春の昼

磨きたる火屋の灯明し春驟雨

山門の外に落花のありにけり

遠くより誰か呼ぶ声春の潮

ペダル踏み橋を渡りぬ柳の芽

春の雪バスセンターに母送る

桑門わかこ

つまみ食ふ鍋の諸子の甘辛煮

春雨の霏こばして鳥の立つ

跳びつきし猫に初蝶食はれけり

川風にもつれて揺るる柳の芽

花立を寄せて雛壇飾りたる

水色の春の服縫ふミシン踏み

日の差して桜の光る雨上がり

大橋博子

うららかに黒光りするレトリバー
こてまりやモデルのボブの傾きぬ
山躑躅萌える日向の馬返し

春北風や四方の引戸の鳴り響く
大なる星座の沈む夜半の春
街路樹をひとつ選びしカラスの巣
ポケットに遊んで投げし花の屑

ふじ女

春日傘同じ仕草の母と子と
菜の花や人の背ほどの鳥居立ち

囀りや昼寝時間の保育園
競技場整備進みて春の鳥
老妻の剥いてくれたる夏蜜柑
菜種梅雨水平線に自衛艦

栄吉

水仙に囲まれてゐる住まひかな
冬桜植ゑて卒業記念とす

こごみ採り浜のお寺に届けたる
花吹雪してゐる庭に客迎ふ
花の屑掃いてまた散る寺苑かな
山桜咲きはじめたる山くだる

紀英子

学校の時計の下の桜咲く

自転車降りて桜の下をゆく

ブロックの穴から蹴躑はみ出して

ひゆうと言ふ声出し子猫怒りたる

よき風に泳いでるたり鯉のぼり

やはらかく目を透かしたる柿若葉

友岡崇山子

一樹づつ匂うて通る梅の道

雲の影谷へと移り山笑ふ

桜葉降る石段に子を抱いて

姫辛夷一枝ごとに日の差して

だみ声の大鴉飛び春深し

二階から芝刈る夫を呼びにけり

松田裕子

訃報の日雨戸を緑れば雪眩し

大山を何度も仰ぎ雪を踏む

一筋の日の差してをり苗障子

転職の多かりし子や木の芽晴

黄金山桜並木が山を巻く

ちらし寿司木の芽を添へて飾りたる

宮田保江

春風やいくども挑む遂上がり

車から置き竿を見て春なかば

元氣かと母から届く蓬餅

花すみれ柱状節理の境目に

土手に沿ひ行つては戻る花見舟

通学の棧橋揺れて若布伸ぶ

森口良樹

夫の里蕨を摘んで帰りけり

道端のここに地獄の釜の蓋

虎杖を折りて味噌和へ作りたる

ふる里の背戸の屈を和へてをり

清明の潮しづもる安芸小富士

阿姫

一晚に数の増えたる落椿

リハビリの庭に眺める桜かな

墨色に染まる山の端花の雨

哲学の道に沿うたる花筏

草餅やベンチに座り川眺む

井藤希

松陰の旧居に濡れて梅の花

枕木を踏んで近道雪の朝

花の雲爆心の地を覆ひけり

目覚めたる耳に聞こゆる春の鳥

じやんけんで分け合ふ小石春の風

ヒロシマの川に流れて花筏

鶯の鳴き渡りゆく墓参り

記念樹をふれる手に吹き春の風

ちりりん和鐘鳴らし売る蕨餅

故郷の山に咲きをり土佐水木

産院の前にうぶ声春の風

蕨餅揃ふ杓文字をじつと見る

つばめ飛ぶ勤め帰りの駐車場

からたちの花に静かな雨の降る

筍の地表に出でて鋭かり

大畑恵

白神陽子

穂高

山茶花のまづは一輪庭の隅

春隣妻と二人の時しづか

夢去りて残る五体に春の風

舗装路に滂沱たる雨戻り梅雨

英一

数独の枡目を埋め春の夜

続きるる九九の暗唱菜種梅雨

対岸へウォーキングする花曇

一碗の酒を供へて花の夜

熊谷ゆり子

春の空見上げてバイクこぐ私

面会の時間が迫る春の夜

新しい人が働く四月かな

阿波久

山葵田のすみずみに水流れをり

三極の花の咲きだす山の寺

久々に訪ねし村の花杏

遠藤さつき

マスクして顔の半分隠れたる

チューリップ大きく咲いて崩れけり

春の風窓開けてなほ入れにけり

かこ

カクカクと子の一輪車春の風

菜の花の黄色のよぎる車窓かな

船を待つ間に波止の若布刈る

新庄憲彦

網を干す漁師の眺め春の海

春の夜の冷たき風が時に好き

枝伸ばし川面に桜咲きにけり

民

花の中三羽の目白来てゐたる

春月のあかあかと照る夜中かな

疫病の続く春の夜「ベスト」読む

ちかこ

エープリルフルと誰か口にせり

夫の先腕振り歩く春の宵

春の夜や読み返したき本のあり

撫子

雀の子行く手行く手を跳ねにけり

莫塵を敷く背中に受けて花の風

春の夜のぼんやりと聞く雨の音

春日傘園児を乗せてバス送る

弁当に帽子に花の散りにけり

春の海背にして上る社かな

雪柳づく小道の先に住む

空の色桜の色を写生する

永き日の日に向かひたる帰り道

幹

みさ子

やす保

老犬をおいでと呼べり春の暮

着慣れたる着物で歩き春の風

津田玲子